『中外日報』平成８年１月１日付（25402号）16-19面

震災関連記事のみの抜粋です

記事中に欠落部分がありますがご了承下さい

兵庫県南部地震から一年

座談会　苦労を被災者とともに

「ボランティア活動」を語る　各宗派　青年僧

五千五百人を超える死者を出した未曾有の大災害、兵庫県南部地震が発生してこの十七日で一年が経過する。現在、あの凄惨を極めた震災の印象も人々の心の中では次第に風化しようとしている。被災地は一見、もとの平穏な状態を取り戻したかのような印象を人々に与えているが、現地に入ると、復興に向けて動き出しているとはいえ、まだまだその壮絶なツメ跡が至るところに残っている。また、何より震災で家族や財産を一瞬にして失った被災者の受けた心の傷はいまだに癒えていない。震災の当初から、物量的な救援の後には息の長い地道な精神的なケアを含めたボランティア活動の必要性が指摘され、宗教者の活躍に期待が寄せられていた。震災が起こったその日から現地に入り、今もボランティア活動を地道に続けている仏教各宗派の青年僧侶を招き、震災の一年間を回顧するとともに、所属教団や行政等への要望や今後の活動における展望などを語り合ってもらった。（16～19面）

出席者（五十音順）

京都教区浄土宗青年会会長　**小林　浩輝氏**

天台仏教青年連盟副代表　**竹内　純照氏**

全真言宗青年連盟事務局長　**橋本　寛昌氏**

全真言宗青年連盟事務局次長　**平野　雅章氏**

浄土真宗本願寺派高岡教区寺族青年会前会長　**村上　教文氏**

天台仏教青年連盟前副代表　**吉田　慈敬氏**

菩薩行、報恩行息長く

僧侶だからできる活動継続

－先ず最初に、皆さんがこれまで取り組んでこられた活動の概要について聞かせて下さい。

橋本　私は、自坊が神戸市北区で、各地の青年会や全日本仏教青年会（全日仏青）と連絡をとるのに都合がよく、全真言宗青年連盟（全青連）の事務局長をしています。

震災後、まず各ブロックの青年会会員の安否を確認して情報収集をしました。それから全日仏青やアーユス（仏教国際協力ネットワーク）の協力も得て、ひよどり台斎場で仮設の読経所を設けて回向法要を営み、被災者の方にたいへん喜んで頂きました。

現在は立場的に弱い子供や老人、身体の不自由な人たちに対し我々のできる範囲でのケア、すなわちイベント的

になりますが映画とか、ぬいぐるみショーとかの活動を続けています。
　これまで活動してきて嬉しかったのは、あらゆる宗派の青年僧侶の皆さんと情報交換や協力ができ、今後の活動のテーマを見いだすきっかけができたことです。
　しかし、震災後十一ヵ月余が経過し、活動できる範囲も限られてきていますので、今後は僧侶でなければできない部分にこだわらずにもっと幅広く知見を広げて活動できる方向を検討しています。
　村上　本願寺派は本山として物資を送るなどいろいろな活動を行なってきましたが、なかなか情報が行き渡らないお粗末な状態でした。そのため各教区や各団体が自主的に活動してきたのが実情です。
　私が最初に神戸に入った時は、高岡教区の方々と、倒壊した寺の瓦礫の撤去を手伝いました。二回目からは宿泊所もないので、単独で長田区の友人の寺からコンタクトを取ってもらい、蓮池小学校に入り、ここを定点として活動しました。
　初め野菜サラダを食べたいという人が多いのでサラダや雑煮を作り、また、餅搗き大会をしたり、下着などの物資を運んだりを四～五回続けました。
　そのうちに仮設住宅で新たな問題が出てきて、五月頃からは仮設住宅の訪問をしました。
　兵庫区の荒田公園に仮設住宅が六十二戸ありましたが、六月八日に北海道の青年僧とともに回って孤独死を発見したこともあります。
　こうした活動の中でご縁を結んだ被災者の力と一緒に支援活動をさせて頂くようになり、その方が六月に西区の仮設住宅に移られ､｢こちらへも来てもらえないか」という要望があり、約一千百戸のその仮設住宅街で現在も活動を続けています。
　吉田　天台宗は一隅を照らす運動等があり、その一環として宗教者ができることを模索してきました。
　震災後、直ちに比叡山や宗派から役員が被災地に出向きました。我々はその状況を聞いて何ができるかを協議し、現地仏青を支援する形で一月十九日から炊き出しをしようと決め動きだしました。
　竹内　犠牲者の四十九日が過ぎてからはだんだん熱が冷めて、現地入りする人も減りました。しかし、現地の青年会の人たちや民生委員の方々と組み、一定地域のバックアップを今も継続しています。
　降ってわいたような災害であり、土壌もなしに安易に「何かしてあげられるのではないか」と考えてやって来たような人は挫折していきました。振り返れば、宗教者としての日常のあり方が厳しく問われたのではないか、と思いますね。
　小林　全国浄土宗青年会の近畿六教区で取り組むことになり、おしめを現地に持って行ったり、炊き出しとか西宮の斎場の回向などを行ないました。
　また、潰れた寺の本堂から本尊を掘り出したり、養護学校の避難所で子供たちと一緒に遊んだり運動会などを行なってきました。全国的には静岡から盆踊り、佐賀からは炊き出しなどがありました。
　活動資金は、近畿の救援委員会に全国から義援金を送って頂きました。また、寺に呼びかけ、仮設住宅での日用品の配布などもしました。
　五、六月頃まではそういう形で進めましたが、それ以後は地元（行政）の頭越しにやるのはいけない雰囲気になり、一般ではできない、寺院を拠点にした活動に切り替えました。

教団の対応には疑問も

宗教者より人間として活動を

－宗教者としての活動のあり方については、満足の行く活動ができたと思われますか。
竹内　山折哲雄・国際日本文化研究センター教授が「僧侶は、確かにいっぱい動いたが、僧侶らしい活動はできなかったのでは」と指摘していましたが､｢僧侶らしい活動」とは何なのでしょうか。山折氏が指摘されていることと、実際に現地で求められていたことは違うのではないかと思うのです。

言い換えれば、頭の中で考えているのと現地でのニーズは違うのです。まずは、被災［1行欠落］に汗を流して涙を流す中から自然と出てくることが本当のあり方ではないでしょうか。

小林　とりあえず飲料水や食糧を持って行った時に「あんたらどこの人や」「浄土宗の青年会や」「アピールせんでええんか」「別にええんや、食べてもうたら」というようなやりとりがありました。

しかし、考えたらそういう活動ができたのは、私たちが宗教者であるから、ということではないかと思うのです。

だから、活動の途中からは「布施行」であると考えるようになり、宗派云々ではなく僧侶として当然のことをさせていただいていると思いました。

橋本　被災の現場では、かえって袈裟を着けているとまずいのです。今皆さんの話を伺っていると「何と心の豊か［数行欠落］つまでやるつもりや」というような言葉が頻繁にでてくるわけです。それも宗門の中の［1行欠落］から行動が始まる。つまり、宗教者というより、一人の人間として考えることが大切だ［1行欠落］よりよい出会いだったと思う方もいるでしょう。それをひと纏めにして「宗教者の役割」という言い方は非常に大胆なご意見だと思います。

宗教者ということに拘泥せず、異なった形の表現や活動があっても何ら不思議なことはないわけで、我々はもっと自信を持つべきではないかと思います。

真言宗は、今回の震災で一致団結して活動ができたと思いますし、また、その中で他宗派のＳＶＡ（曹洞宗国際ボランティア会)、浄土真宗、臨済宗、浄土宗の方々ともご一緒させて頂きました。

これは、とかく既成仏教教団の悪癖と言われています宗派意識、その垣根を超えた活動への可能性を見いだすきっかけではないかと思うのです。

村上　神戸には三泊四日程度の日程で滞在しましたが、準備や現地との連絡などで全部で約半月はかかり、その間は自坊の仕事はできないのですが、「とにかく継続が大切だ」と自分に言い聞かせてやってきました。

しかし、オウム事件以降は世間の関心が薄れ、周囲からも「村上はいつまで震災のことばかりやっているのか」と言われ、また、被災地の人たちや現地のボランティアの人々との軋轢も生じ、こうしたことで悩みました。それと教団の対応にも疑問を感じました。教団は、平成十年の蓮如上人五百回遠忌法要のために百九十八億円の予算を組んでいますが、この一部を震災対策に回すよう嘆願しても「人の褌で相撲を取るのか」と相手にされませんでした。

これには本当に悔しい思いをしました。その教団が平気で「信心の社会性」などと言う。これはもう完全な机上の空論じゃないかと思います。

そのようなことでモヤモヤとしたものを胸の中に抱えて活動している時に、臨済宗妙心寺派の僧侶でボランティア活動をされていた宮下玄覚氏と出会いました。

宮下氏は、悩む私に「我々禅宗では菩薩行で、真宗では報恩行なのです。これは僧侶ならやって当然のこと。なにもことさらにボランティアと言う必要もありません」と教えて下さったのです。

本当にその通りであると思いましたね。この混沌とした状況の中に自らが足を運び、そこで悩み苦しんでいる人たちと共に歩ませて頂くことが大切なのであると。

竹内　私は、若い僧侶たちを連れて被災地に入ったのです。実際に現場を見ることで何かを感じてくれるだろうと思ったのですが、多くの者が「一回いけばいいだろう」という感覚でした。［1行欠落］とても残念でしたね。その一方で自坊では後継者として大切に育てられ甘やかされてさえいるのです。

こんな状況で「僧侶とは何か」「僧侶らしい活動とは何か」を云々しても仕方がない。先ず自分の僧侶としてのあり方を問わないと駄目ですね。私は、別に「僧侶らしい活動」にこだわる必要はない、ただ信心に基づいて行動すればよいと思います。

橋本　「僧侶らしい活動」にこだわるのは外部で見ている人たちの考えです。私どもはたまたま真言宗の僧侶だったのですが、僧侶のかっこうをして行くと、被災者の人たちの中には真言宗の檀家じゃないと駄目かと思う人たちもいるので、ツナギの作業着で活動をしました。

避難所の仮説電話で友人や知人と安否を確認し合う被災者［写真は省略］

活発に意見交換する（右から）平野、小林、竹内、吉田、村上、橋本の各氏［写真は省略］

平野　雅章氏［写真は省略］

吉田　慈敬氏［写真は省略］

橋本　寛昌氏［写真は省略］

小林　浩輝氏［写真は省略］

日常の姿勢を見直そう

現地での活動　地元でもできるはず

　吉田　天台仏青連盟としては「祈り」を第一義的に考えています。今回の震災に際してはそのことは充分に出せなかったが、犠牲となられた方一人々々と関わっていく中でその思いを今後の活動の中に生かしていければと思っています。

　平野　現在も活動を継続されている方々は、本当に宗教者としての資質を持っている人たちだと思います。しかし、その一方では、資質が無くても衣を着ている人たちがたくさんいるわけで、このような人たちをどう活動に呼び込むかが問題ですね。

　橋本　生きるためには掴まなければならないのですが、掴んだものはいずれは離さなければなりません。しかし、そのタイミングが宗教者なのに分からない人もいます。

　例えば、半年経って寺を再建しなければならないが、その資金がないとします。宗教者にできる仕事といえば限られていますよね。そうなると絶対に競争になります。

　病院で亡くなられた方々が“商品”となり、それを僧侶が取り合いをすることになっています。これじゃあ駄目です。宗教者のモラルが元に戻らなければ信者は戻ってはきません。

　竹内　モラルなんてことをあえて言わねばならぬことが問題です。震災の直後に京都駅前のホテルに神戸ナンバーの高級車がいっぱい止まっていましたが、ある新聞記者が「あれはみんなお寺さんですよ」と教えてくれました。

　現場がまだ燃えているのに自分たちの家族だけが良い思いをしている。私は絶対許せないと思いました。

　橋本　震災は日常生活を完全に破壊しましたから、あえてモラルのことを言う必要はないのでしょうが、「宗教者の役割」とは先ず自らが問わねばならぬことでしょう。

　復興の兆しが見え始めているとはいいますが、震災の後遺症は立場の弱い人たちに大きな負担を強いています。宗教者がこうした人たちの心の支えになるためにも、超宗派でみんなが集える場所が欲しいですね。

　竹内　先ほどから「宗教者としての活動」「仏教ボランティア」という言葉が何度も出てきましたが、そうした言葉をわざわざ使わなければならないのは、普段何もしていないことの裏返しではないでしょうか。

　普段は何もせずに、震災があった時だけ被災地へ行くということは、本当は簡単なことです。それよりも例えば近所にいる寝たきりのお年寄りにどう接しているかというような日常的なレベルでの姿勢が問題です。その視点が無ければ被災地で仏教ボランティアをやっていると言っても、ただのお祭り騒ぎに過ぎないことになります。

　村上　そうですね。神戸ではできてどうして地元ではできないのかという反省は感じます。恥ずかしいことですが、私は最初は「一回行けばよいだろう」というくらいに思っていました。

　私たちの寺族青年会は、最初はカンボジア難民の救援活動から取り組みを始め、安全な飲料水を供給しようと井戸を掘ったり、小学校を建てたりしました。

そして、次第に「自分たちの足元を見つめ直すことが大事ではないか」ということで、障害者施設の方々との交流を続けたりしていたのですが、どうしても自分の問題として捉えることができないという“壁”にぶつかりました。

そのような状況の中で今回の震災が起こったのです。今日までは、一人でも多くの苦悩の人々に安堵感を与えようとして関わり、また、その過程では常に自己反省を繰り返しながらの活動でした。

橋本氏も指摘しておられますように、思想や宗教の壁を超えてお互いが手を携えて活動する場を作るということは本当に大切なことだと思います。

被災者の方の悩みや苦しみは、他人事ではない、我々自身の問題であると捉えて、一日でも長く皆さんとともに歩ませて頂きたいと願っています。

◇以下は18面につづく◇

今回の震災では一瞬にして電気、ガス、水道などライフラインが破壊され、市民とボランティアの長く苦しい戦いが始まった［写真は省略］

竹内　純照氏［写真は省略］

村上　教文氏［写真は省略］

弱い立場の人々にまず救援の手

ボランティア活動を語る

青年僧座談会　17面のつづき

バイクで現地走った

情報収集、ゼロから出発

－震災に当たって自分たちがどのように動けばよいかの活動の方向性がすぐに見えてきましたか。

橋本　私は神戸なのですぐ目の前が被災地です。「何をしていいかわからない」ということも含め、僧侶として「亡くなられた方がどうなっていくんやろ」ということが気になりました。犠牲者の数がテレビで流されているだけで「実際はどうなっているのか」と痛切に思いました。

それに被災の中心地の近郊（北区）で被害が比較的少なかったので「動けるのは我々や」と思いました。それで私もさっそくスクーターで現場の街の中を走ったんです。

すると、火事の煙煤の中で子供たちが逃げまどっており、「これは何かをしなけりゃならん」と思い、平野君や会員に携帯電話で緊急物資の手配をしました。

小林　震災の翌日の十八日に大阪で会議があり「何かできへんか」ということで私を含めた若手四人がバイクで現地に行きました。

ほんとうにひどい状態で「何ができんのやろ」「何もでけへんな」というのが実感でした。打ちのめされたというか、「取りあえずお金を集めるぐらいしかでけへんな」と。

やはり気になったのは子供のことですね。オムツを毎日替えんといかん、ミルクも必要や。弱い立場の人たちのためにいますぐ物資で要るものを持って行こうと、そのあたりから見えてきましたね。それがなかったら単にお金を集めて市に送っておしまいだったと思いますね。

村上　最初、神戸に行った時に「本山の情報を頼りにしていては動けない」と判断しました。それで、各地にいる友人と連絡を取り、全国の青年僧侶たちが独自に動きました。

自分たちの足で一ヵ寺ずつ回り情報を得ることから始めねばならず、ゼロからのスタートとの思いでした。震災の被害は、本願寺派の寺院だけでも約二百八十ヵ寺ありました。

お寺のご寺族も亡くなり、被害を受けて全焼、全壊が五十ヵ寺を数えました。そうしたお寺にもお伺いして仏旗を立てたり、瓦礫を撤去したりの活動を行ないました。

今では全国の青年僧侶が独自に集まって情報交換しながら、灘区の六甲道駅の近所の光圓寺にプレハブを建てて、これを「六甲庵」と名付け、浄土真宗の連絡基地として活動しています。私もここを拠点にいろいろ飛び回っています。

このような非常事態では、実際に何をしたらよいかは現地に入らないと分からないと思います。

最初は「一度行けばいいだろう」と思っていました。高岡教区の教務所長から「何とかしてほしい」と言われて、また、神戸に友人がいたこともあり、軽い気持で現地に入りました。

ところが、現地では、その友人が「一週間ぶりにご飯を食べた」「泥棒が入って被害を受けた」とか言いますし、私も外国人の不法滞在者に夜中に追いかけられたり、車に当て逃げされたりで、これはただごとじゃあないなと思いました。

お寺の境内での温かい炊き出しは被災者にとり何よりのご馳走だった［写真は省略］

行政に宗教アレルギー

「学校での回向」に拒否反応も

ーボランティアを受け入れる行政側の対応に様々な問題があったことを指摘されていますが、皆さんは実際に活動されて、行政に何か不満を感じられることはありましたか。

小林　私たちも十九日に神戸市の対策本部でボランティア登録したのですが、「宗教ですか」と嫌な顔をされました。僧衣や作務衣で活動しようとすると、公的機関などでは宗教色が出るので遠慮してほしいと言われました。

だから、小学校などの公的な場所にご遺体が安置されていても、勝手に追悼するのならよいが、許可を求めると拒否されました。ひよどり台斎場での回向も超宗派ならば許可するということでしたね。

橋本　震災時に限らず遺骨をお預かりする時に、許可云々ということがあるのですが、我々が行なう宗教的な活動に対していちいち許可がどうのと言われることには疑問を感じることがあります。

我々宗教者もそうですが、医療関係者、工事関係者など様々な専門家が震災の時には現地へ入っていました。行政は、このような専門家をどううまく活用するかを考えてほしいです。

吉田　支援物資が集まっているのに、被災者の人数分だけ数が揃わないと配ろうとしない。中には送られてきた古着を見て「古着なんて送って……」と怒っている職員もいました。

小林　私も同じことを目撃しました。毛布が九百枚あるのに被災者が一千人だからあと百枚が来るまでは配ろうとしないし、また、そこで働いているボランティアの人たちも同じ考えなんです。みんながそうだとは言いませんが、基本的に行政は頭が固いなと思います。

橋本　真言宗の各本山などから集まった救援物資を神戸市等の災害対策本部の指示で指定先に届けたのですが、実際にはその物資の分配はうまく行なわれていなかったですね。

それに、最初の頃は物資を避難所に届けても「こんなには要らないからヨソへ持って行け」と言われ、どこへ運べばよいかも分からず戸惑うこともしばしばでした。

このような緊急時には、いち早く情報を収集して、それを適切に伝達することが大切であり、行政は今からでも遅くはないので、ぜひとも今後のためにマニュアルを作成すべきでしょう。

竹内　情報の不備という点は皆さんのご指摘の通りですね。何が必要なのかを聞いても、最初の頃は行政はほとんどそれを把握していなかった。例えば看護婦一人派遣したいといっても行政は対応できず、結局、現地のボランティア団体だけが頼りでした。

橋本　一番問題だったのはボランティア団体に加盟しているか否かで行政から活動の範囲が制約されることでした。ボランティア活動をするのに行政の許可が必要なわけですね。これが随分と活動の妨げになりましたね。

このような大規模の災害がこれまで無かったこともありますが、今後このような大規模災害が発生した時に即応できるような体制作りが必要ですね。

宗教者としての役割を発揮せよ、と言うのならば、宗派にこだわらぬネットワークを作り、行政と膝を交えて討論できるパイプを設けることも必要だと思います。これは、被災を免れた寺院の役割でしょう。

話は少し横道にそれますが、これは宗教法人法についての宗教者の対応についても言えることです。つまり、全ての面で宗教者が自分のカラーを出し過ぎるのです。

◇以下ば19面につづく◇

炊き出しは震源・淡路島の北淡町でも［写真は省略］

災害時のマニュアルを作ろう

報道重点オウムに移る

次第に薄れゆく世の関心

寺院に冷たい一般マスコミ

－オウム真理教の事件以降はマスコミの関心が神戸からオウムに移り、国民の関心も薄れてしまったのですが、これが皆さんの活動にも影響したのではありませんか。

村上　時間の経過に従って人々の関心が薄れていくのはある意味では仕方がないことですが、オウムの事件はやはり神戸の人たちにとり大きなマイナスだったと思います。

吉田　去年はちょうど戦後五十年だったのですが、その年に震災とオウムの事件が起こったことは、人間とは何かが問われた年というべきではないでしょうか。

平野　いまマスコミの話が出ましたが、このような震災の場合、一般マスコミはあまり寺院のことを取り上げないように思います。マスコミは否定するでしょうが、被災にしても神社や教会の扱いが大きかったでしょう。

だから、僧侶がボランティアをしていてもあまり取り上げられない。「それは当然のことでしょう」との理由ですが、別に広報や宣伝をする必要はありませんが、この辺の事情を変えていかないと私たちの活動に対する一般の共感も得られないのでは、と危惧します。

吉田　別にこちらから売り込む必要はないですが、「私たちはこのような活動をしているので、皆さんも集まって来て下さい」という願いがなかなか伝わらないのは事実ですね。

竹内　私は京都ですが、京都という近くにいてさえ、もう神戸は過ぎ去った出来事になっています。ですから今後は、マスコミでは伝わらない情報を伝え、被災地とこちらをつなぐ媒体としての活動も大切だと考えています。

一周忌をねんごろに

仮設住宅の訪問続ける

－まもなく一周忌を迎えますが、追悼法要などを含めて今後の計画について聞かせて下さい。

橋本　全真言宗青年連盟では、一月十七日に犠牲者の慰霊法要を営ませて頂きます。また、須磨寺では送り火法要を営みますし、全日本仏教青年連盟や神戸仏教青年会とも連携して被災地で慰霊行脚を行ない、各宗派が営まれる法要にも随時参列させて頂こうと思っています。

それに、被災寺院の境内をお借りして子供たちのために映画や縫いぐるみショーなどを催してまいりましたが、これは今後も継続して行ないたいと思います。

村上　一月十七日に、本願寺神戸別院や、灘区の光圓寺の境内にあります私たち青年僧侶の活動拠点「六甲庵」では、一周忌法要やバザーを予定しています。

私は一月十六日から二十四日までの間、神戸に入り、高岡の方から仏青や仏婦の会員らをどんどんと神戸に送り込んでもらい、こうした催しのお手伝いをさせて頂こうと思っています。

それに、これまで約二千戸の仮設住宅の方々にご縁を結ばせて預きましたので、こちらへも訪ね、被災者の方々がお元気で暮らされているかどうかを確認しようと思っています。

竹内　一月十六、十七の両日には現地で慰霊法要を営ませて頂きます。それと、現在、現地対策本部が設置されているのですが、いろいろな柵（しがらみ）もあり、動き難い面も出ていますので、十七日で解散し、後は本当にやる気のある者で地域と密着した地道な活動を続けていくつもりです。

小林　浄土宗青年会では、全日仏青救援センターが設置され、この活動の一環として震災の救援本部を急遽設置して活動してきましたが、一月十四日から十七日までの念仏行脚（知恩院を出発して国道171号線を通り、神戸市東灘区で本堂の下敷きになり死去した住職の寺まで）を実施した後、一応救援本部を解散します。

これからは、今後このような災害が起こった時に私たち青年僧侶のボランティアは、どのような活動をするべきかのマニュアルといいますか、本を作ろうと思っています。

鉄道や道路など都市の大動脈はすべて分断され、人々はひたすら歩いて神戸へと向かった［写真は省略］

袈裟を外して活動を

宗派意識拭い去るため

－先ほどからマニュアルのことや、超宗派の活動拠点のことが話題となっていますが、この点についてご意見等があれば聞かせて下さい。

村上　少し乱暴に聞こえるかもしれませんが、安全な所にいてあれこれと言っていても仕方がないわけで、私たちのような若手が真っ先に現地に入り、詳細の状況を把握し、判断して各関係団体に連絡をとることが先決だと思います。

それとですね、一人でも多くの被災者と接触を持ち、話し合って、現地の人たちとの間に信頼関係を築き上げることも大切なことですね。

竹内　今回の震災では情報が迅速、的確に伝わらなかった点が大きな問題だったと思います。それで、私どもではパソコン通信のネットワークで情報伝達がスムーズに行くようにしようとしています。

これは、今後の教化活動のことも含めたものですが、緊急の際にはそれに即応できるような情報網の構築が必要です。

小林　先ほどから指摘されていますが、行政や組織の問題について言うと、どうしても日数が経つと政治や組織が前面に出てきて最初のようにがむしゃらには活動ができなくなりました。この弊害を何とか打破するような活動のあり方も検討されなければなりません。

橋本　超宗派での活動ということなのですが、我々僧侶は袈裟を着けているとどうしても宗派意識が出てきますので、袈裟を外してやらねばならない部分が出てきます。

　そして、そのようにしてやっている分には別に問題はないのですが、少し離れた所で見ている人たちは、どの宗派が良いかと優劣の視点で見ているのですね。
　超宗派、全国レベルでの活動となりますと、全日仏青などが中心となるべきでしょうが、その活動には、宗派は関係無いという意識の変革が先ず必要ではないでしょうか。だから、各宗派が宗派仏青のレベルでの組織のリニューアルに取り組むべきです。

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)